

# 観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間の「パターン」の仮説とそれを用いた観光地評価の試行

笠間 聡<sup>1</sup>・松田 泰明<sup>2</sup>

<sup>1</sup>正会員 国立研究開発法人土木研究所 寒地土木研究所（〒062-8602 札幌市豊平区平岸1条3丁目1-34）  
E-mail: kasama@ceri.go.jp

<sup>2</sup>正会員 国立研究開発法人土木研究所 寒地土木研究所（〒062-8602 札幌市豊平区平岸1条3丁目1-34）  
E-mail: y-matsuda@ceri.go.jp

近年、「世界水準の観光地の形成」や観光地の魅力向上が言われるが、このためには観光地の魅力を効果的に引き上げるべく、これに寄与する観光地の屋外公共空間のあり方についても明らかにしていく必要がある。筆者らは、先行する研究において、国内のいくつかの温泉街型観光地とその屋外公共空間の現状に関する調査・分析の結果から、観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間の「パターン」について仮説を得た。

本発表では、この「パターン」の仮説を用いて新たに12の観光地の評価を試行し、その結果から、これらの「パターン」の温泉街型観光地以外の観光地への適用可能性、および、観光地の評価手法としての有用性について検討を行った。

**Key Words :** *Public Spaces, Tourist Destinations, Attractiveness, Element, A Pattern Language*

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景と目的

近年、地方都市の衰退や少子高齢化などを背景に「地方創生」や「観光立国」の必要が叫ばれ、一方では訪日外国人旅行者が2016年にはとうとう年間2,000万人を超える中、観光への期待はますます大きなものとなっている。しかしながら、国内の観光地には魅力の改善、磨き上げが必要な地域も少なくなく、北海道総合開発計画<sup>1)</sup>でも「国際水準の観光地の形成」や「魅力ある観光地域づくり」が必要な施策として挙げられている。

その際、観光地の魅力を考える上で、景観や空間の質は非常に重要である。これには例えば、観光地の魅力を構成する要素について研究を行い「空間快適性」のウェイトが相対的に高いことを明らかにした運輸政策研究所の研究結果<sup>2)</sup>などがある。

しかし、それらの「空間快適性」、すなわち観光地の空間的な質や魅力を効果的に高めるための具体的方策については、十分に研究が行われていない。

そこで筆者らは、観光地のパブリックな空間に焦点をあて、その魅力向上の手法と、観光地全体の魅力アップへの貢献方法について研究と検討を行っている。本研究は、観光地の屋外公共空間を対象に、観光地の魅力に寄

与する要素や要因を明らかにし、観光地の効果的な魅力向上方法について知見を得ることを目的としている。

### (2) 本研究（本発表）の位置づけ

筆者らは、2015年からこの一連の研究に取り組み始め、過去に2編の論文を土木学会にて発表している。

2016年5月の土木計画学研究発表会<sup>3)</sup>では、全国で特に評価の高い6つの温泉街型観光地について現地調査やヒアリング調査を行い、これらの観光地の屋外公共空間の共通点を基に、「観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間のパターンに関する試案」（6のパターン：図-1）としてとりまとめた。

2016年12月の景観デザイン研究発表会<sup>4)</sup>では、この「6のパターン」に対して評価基準を仮に設定し、それを用いて全国12の温泉街型観光地の評価を試行した。結果、「6のパターン」への適合度と観光地への再来訪意欲が正の相関関係にあることなどが確認でき、「6のパターン」への適合が確かに観光地の魅力に寄与している可能性を確認した。

本研究は、これらの「パターン」の温泉街型観光地以外の一般の観光地への適用可能性について検討を試みたものである。なおここで言う「パターン」とは、C.アレグザンダーが提唱した「A Pattern Language」<sup>5)</sup>にならった

### ① 屋外での時間の過ごし方の提供

観光客に散策や回遊を促すものとして、観光地の側から、屋外に繰り出す理由や目的が提供されていること。  
それが広く観光客に受け入れられていること。



①の例：  
黒川温泉(入湯手形)

### ② 観光地のアイデンティティとなる象徴景

当該観光地に滞在することの魅力強く印象づける風景(象徴景)が存在すること。  
そのような象徴景は往々にして、当該観光地の名刺代わりとなり、観光ガイドの扉写真や観光ポスター等に広く採用されている。



②の例：黒川温泉

### ③ 豊かな自然と一体化した街並み

周囲に山林や農村などの豊かな自然環境があり、観光地の中核からもそれらを見通すことができること。また、街中にそれらの自然環境とつながりのある要素がちりばめられていること。  
これらにより、周囲の豊かな自然と街並みの一体感が感じられること。



③の例：由布院温泉

### ④ 景観に優れた適度な長さの散策路

景観に優れた環境の中をゆっくりと散策できる環境が整っていること。  
それにより、日常とは異なるその地ならではの世界観に十分に没頭できること。



④の例：有馬温泉

### ⑤ 散策や滞留の拠点となる広場等

散策や滞留の拠点となり、休憩、写真撮影などに利用できるゆとりある広場等が、観光地の中核に存在すること。  
そのような広場等では、居ながらにして、観光地の風景や風情を心ゆくまで楽しむことができる。



⑤の例：小樽

### ⑥ 歩行者優先の街路空間

往來する自動車に観光を阻害されることのないこと。



⑥の例：小布施

図-1 観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間のパターンに関する試案（「6のパターン」）

ものである。

## (3) 研究の方法

先述のとおり、本研究(本発表)の目的は、筆者らが過去に温泉街型観光地に関する研究から導き出した、「(温泉街型)観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間の6つのパターン」の試案について、温泉街型観光地以外の一般の観光地への適用可能性について検討を行うためのものである。

このため、以下の手順で研究を行った。

### a) 観光地評価の試行

過去の論文<sup>4)</sup>でも用いた「6のパターン」とその評価基準を用いて、新たに10の観光地(温泉街型観光地以外の一般の観光地)の評価の試行を行った。

なお、これらの観光地の評価にあたっては2016年10月～12月に当該観光地の現地調査を行い、評価の試行はこれらの調査結果に基づいて行っている。

### b) パターンへの適合に関する考察

今回調査とパターンへの適合度評価を行った10の観光地は、いずれも街歩き型、街並み散策型の観光地として

比較的评价の高い観光地である。したがって、6のパターンが一般の観光地にも適用できるものであるならば、いずれの観光地でもパターンへの適合度は高くなるものと予想される。

このため、10の観光地とパターンへの適合状況について確認を行い、これについて考察を行った。

### c) パターンへの適合と観光地の魅力評価の関係に関する分析

パターンへの適合が、観光地の魅力向上に寄与するのであれば、パターンへの適合度と観光地の総合的な魅力評価との間には右肩上がりの関係があるはずである。そこで、これに関する分析を行った。

しかしながら、ここで問題となるのは、観光地の総合的な魅力度を示す指標や調査結果に、適当なものが存在しないことである。温泉街型観光地の場合と同様に、観光地のリピート希望率などが適当な指標として考えられるが、筆者らが期待するような観光地の単位を対象として、統一的な調査を行った成果は確認できていない(都道府県を単位としたものなどはある)。各観光協会等のアンケートで把握されているケースもあると考えられるが、結果が公表されているものは少ない。

そこで、海外観光客の視点から国内観光地を評価するという視点も込めて、海外の編集者による観光ガイドなどをもとに、観光地の魅力評価に代替するものとした。

### d) 観光地評価のケーススタディ

将来的には、このようなパターンをもとにして、観光地の診断を可能としたい。

6のパターンが一般の観光地にも適用可能との前提のもと、6のパターンと評価基準を用いて、観光地評価のケーススタディを実施した。対象としたのは、筆者らの研究拠点にも近い小樽と、神奈川県藤沢市の江の島である。

ケーススタディをもとに、パターンの観光地の診断手法としての適用可能性について考察を行った。

## 2. 観光地とパターンへの適合度評価の試行

「6のパターン」と評価基準を用いて、パターンへの適合度の評価を行った。用いた評価基準は、表-1のとおりで、先行する論文<sup>4)</sup>で用いたものをごく一部修正して用いている。

対象とした観光地は表-2のとおりで、徒歩圏規模、観光地の独立性といった条件を継承しつつ<sup>4)</sup>、全国で評価の高い街歩き型の観光地から選定した。なお、本来であれば評価対象とした観光地の範囲を地図等で明示すべきところであるが、諸事情によりここでは割愛し、表-2に調査範囲を類推するのに参考となるであろう地点名の

表-1 採用した「6のパターン」に対する評価基準（※ 青字は先行の研究<sup>4)</sup> から修正した部分）

評価項目	評価の基準
<b>1. 屋外での時間の過ごし方の提供</b>	<p>◎ 観光地の側からの積極的な提案・提供がある。</p> <p>○ 時間の過ごし方が提案・提供はされているものの、利用が限定的である。</p> <p>△ 多くの観光客の利用する過ごし方があるが、観光地からの積極的な提案・提供によるものでない。</p> <p>× そのような時間の過ごし方の提案・提供がない。</p>
<b>2. 観光地のアイデンティティとなるような象徴景</b>	<p>◎ ○の条件に合致し、加えてなんらかのプラスアルファが存在する。</p> <p>○ 象徴景があり、メインストリート等に一致する。</p> <p>△ 象徴景があるものの、メインストリート等に一致しない。</p> <p>× 確たる象徴景が存在しない。</p>
<b>3. 豊かな自然と一体化した街並み</b>	<p>◎ 周囲の自然への見通しと、近景部分に配置された自然要素の双方が存在する。</p> <p>○ 周囲の自然への見通しと、近景部分に配置された豊かな自然要素のいずれかが存在する。</p> <p>△ 周囲に豊かな自然は存在するものの、観光地のメインエリアからは見通せない。</p> <p>× そのような自然の気配に乏しい街並みである。</p>
<b>4. 景観に優れた適度な長さの散策路</b>	<p>◎ ○の条件に合致する散策路が存在し、メインストリートに一致する。</p> <p>○ 景観に優れた、適度な長さの散策路が存在する。</p> <p>△ 景観に優れた散策路は存在するものの、散策路の長さやアクセス、歩行環境等に難がある。</p> <p>× 景観に優れた散策路が存在しない。</p>
<b>5. 散策や滞留の拠点となる広場等</b>	<p>◎ ○の条件に合致する広場等があり、眺望に優れている、または風景上のハイライトに存在する。</p> <p>○ 散策や滞留の拠点となる広場があり、散策ルートやメインストリートに接している。</p> <p>△ あるが、町外れや路地裏等にあり、立地が良くない。</p> <p>× そのような広場等が存在しない。</p>
<b>6. 歩行者優先の街路空間</b>	<p>◎ メインストリート等の空間が、歩行者専用である。</p> <p>○ ↑の空間が、歩車共存の空間で、自動車交通量もさして多くない。</p> <p>△ ↑の空間が、車優先の一般的な歩車分離の街路構成だが、自動車交通量はさして多くない。</p> <p>× ↑の空間について、自動車交通量が多い。</p>

表-2 調査の対象とした観光地の一覧と、各観光地のガイド誌における評価等

調査対象観光地			各観光地の評価等（※）		
観光地名	調査対象エリアまたはその中核	所在地	Michelin	Lonely Planet	文化財等指定
会津若松	七日町通り	福島県 会津若松市	記載なし	1 あり(4p)	
小布施	修景地区	長野県 小布施町	2 ★	1 あり(2p)	
長浜	黒壁スクエア	滋賀県 長浜市	1 星なし	1 あり(2p)	
近江八幡	八幡堀	滋賀県 近江八幡市	記載なし	記載なし	
松江	京橋川・カラコ工房・松江城	島根県 松江市	3 ★★	1 あり(5p)	
津和野	殿町通り	島根県 津和野町	2 ★	1 あり(4p)	
倉敷	美観地区	岡山県 倉敷市	3 ★★	1 あり(5p)	-1 重伝建
宮島	厳島神社参道	広島県 廿日市市	4 ★★★	1 あり(4p)	-2 世界遺産
萩	堀内・城下町エリア	山口県 萩市	2 ★	1 あり(5p)	-3 世界遺産・重伝建
門司港	門司港レトロ・船溜まり	福岡県 北九州市	記載なし	1 あり(1p)	

※ 各観光地の魅力評価を、インバウンド観光客向けの旅行ガイド誌である「Michelin Green Guide」と「Lonely Planet」での取り扱いをもとて試算する。各誌に記載があれば各1点、Michelinの場合は★=1点としてこれに加算。ただし、これらは観光地の総合的な魅力を反映したもので、屋外公共空間以外の、文化的資源や宿泊施設の質なども影響する。そこで、文化的資源の有無や価値による影響を多少なり除外するため、重伝建地区指定の場合-1点、世界遺産登録の場合-2点の補正を行う。

み示した。実際の調査・評価範囲は、ここに示した地点名を核に、その周囲、徒歩圏スケールの観光地としてのまとまりである。

適合度の評価結果は表-3のとおりである。小布施、近江八幡、倉敷、門司港の4観光地が7点以上となり、長浜、

津和野、宮島の3観光地が6点台、以下、萩と松江が5点台で続き、会津若松のみ大きく離れた結果となった。

表-3 10観光地の「6のパターン」への適合度の評価結果

	会津若松	小布施	長浜	近江八幡	松江	津和野	倉敷	宮島	萩	門司港
1. 屋外での時間の過ごし方	×	◎ オープンガーデン	◎ 黒壁巡り	○ 八幡堀 遊覧船	○ 堀川 遊覧船	×	○ 倉敷川 舟流し	△ 門前町(店舗)	×	×
2. 観光地のアイデンティティとなる象徴景	△ 若松城	○ 栗の小径	○ 黒壁スクエア	○ 八幡堀	△ 松江城・堀川	○ 殿町	○ 美観地区	△ 厳島神社・紅葉山	○ 鍵曲・城下町	○ 船溜まり
3. 豊かな自然と一体化した街並み	×	◎	×	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎
4. 景観に優れた適度な長さの散策路	△ 七日町通り	◎ 修景地区界隈	◎ 黒壁スクエア界隈	◎ 八幡堀遊歩道	○ 京橋川周辺	◎ 殿町界隈	◎ 倉敷川等	◎ 海岸沿い遊歩道	○ やや冗長	◎ 船溜まり界隈
5. 散策や滞留の拠点となる広場等	○ 七日町市民広場	○ 笹の広場	○ Cafe 96	○ 八幡堀親水広場	○ カラコロ広場等	◎ 橋詰であい広場	◎ 今橋等	◎ 海岸沿い遊歩道	△	◎ 船溜まり周辺
6. 歩行者優先の街路空間	×	○ 修景地区内	○ 黒壁スクエア	○ 八幡堀周辺	○ 京橋川周辺	○ 殿町通り周辺	○ 美観地区	○ 参道・遊歩道	○ 堀内・城下町	◎ 船溜まり地区
上記6のパターンへの適合点数 (最大9.0)	2.0	7.5	6.0	7.0	5.5	6.5	7.5	6.5	5.0	7.0

※「適合点数」については、各パターンへの適合を、◎=1.5点、○=1点、△=0.5点、×=0点として算定。x6/パターンで9.0点満点。

### 3. パターンへの適合に関する考察

6つの「パターン」それぞれについて、10観光地の適合状況について考察を行った。

#### (1) 屋外での時間の過ごし方の提供

小布施では、オープンガーデン（私有の庭の一般開放）の取組が進められており、これなどは表-1の評価基準の◎こびったり合致する例である。長浜の黒壁（黒漆喰外壁）の取り組みも、黒壁めぐりの散策を観光客に促す取り組みと評価できる。

近江八幡、松江、倉敷では、観光地を流れる小川や堀川などの水面で遊覧を楽しむことができるが、いずれも有料であることから一段下の評価となる。

全体的には、◎から×まで、各観光地によってばらつく結果となった。

#### (2) 観光地のアイデンティティとなる象徴景

それぞれ表-3に示したような象徴景があり、観光協会のウェブサイトや観光ガイドブックで盛んに採用されている。

多くの観光地では観光地のメインストリートに一致したのようになっており、観光地の賑わいや雰囲気が感じ取れるものとなっている。しかしながら、会津若松の若松城、宮島の厳島神社、松江の松江城などは、街の雰囲気を伝えるものではないため一段低い評価としている。

◎評価の観光地はなかったが、全体として○あるいは△評価であり、各観光地横並びに近い評価となった。

#### (3) 豊かな自然と一体化した街並み

街中に緑や自然の気配が乏しいのは、会津若松と長浜である。

倉敷と門司港は水辺に沿った街で、津和野や近江八幡、

松江でも水面が街を貫いている。

なお、街中に街路樹や並木が存在するのは、門司港と倉敷（川沿いの柳並木）、宮島（海辺沿いの松並木）だけである。小布施、近江八幡、萩などでは民地の植栽の貢献が非常に大きい。

総じて◎や○と高い評価の観光地が多い一方、一部に×評価の観光地もある、という結果となった。

#### (4) 景観に優れた適度な長さの散策路

多くの観光地で複数のルートが存在し、行きと帰りで違うルートや、自分の興味にあわせたルートが選べるようになっている。メインストリートが散策路に一致しているケースも少なくない。

例外は、歩行環境やルートのバリエーションで劣る会津若松のみで、いずれの観光地も◎あるいは○の評価となった。

#### (5) 散策や滞留の拠点となる広場等

広場自体は、いずれの観光地にも存在している。

しかしながら、小布施の笹の広場や、長浜のCafe 96などは観光客の数に対して十分なスペースが確保されていない。近江八幡や松江では、八幡堀親水広場やカラコロ広場などは十分なスペースと眺望を有する広場である一方、立地が最善ではなく、一方で、橋上などの眺望と立地に優れた空間は滞留に十分なスペースがない。

会津若松の七日町市民広場は、規模が大きすぎ、七日町通りを散策する観光客には「引き」が大きすぎるように感じられた。

多くの観光地で○以上の評価となった。

#### (6) 歩行者優先の街路空間

歩行者専用なのは、門司港の船溜まり地区で、他は自動車の通行の少ない歩車共存の街路空間が大半である。

会津若松の七日町通りと小布施の修景地区外周の国道は例外で、交通量が非常に多く、観光客にとって自由な散策の妨げとなっている。

◎評価の観光地こそ少ないものの、会津若松を除き、すべてが○以上の評価となった。

### (7) 評価結果の考察

10の観光地のうち、7の観光地が適合度6.0点以上、9の観光地が5.0点以上と、調査対象とした観光地の多くでは「6のパターン」への適合度が高い傾向にあった。

各パターンごとに見てみると、いずれの観光地でも評価が高いのは、「4. 景観に優れた適度な長さの散策路」「5. 散策や滞留の拠点となる広場等」「6. 歩行者優先の街路空間」の3つであった。「3. 観光地のアイデンティティとなる象徴景」については、◎評価こそないものの横並びの傾向であった。

各観光地で差がついたのは、「1. 屋外での時間の過ごし方」と「3. 豊かな自然と一体化した街並み」の2つであった。前者については各観光地で取り組みに違いがみられることを示している一方、後者については、自然環境は豊かでないが魅力的な観光地もあり得るということを示しているように考えられる。

## 4. パターンへの適合と観光地の魅力評価の関係に関する分析

先述(1章)のとおり、観光地の総合的な魅力の評価指標として、今回の分析に用いることができる適当なものは見つからなかった。そこでやや強引ではあるが、以下による点数を観光地の総合的な魅力を代替するものとして算出し、これと、表-3の適合点数との関係について分析を行った。

参考にしたのは、海外の編集者による英文観光ガイド誌2種(「Michelin Green Guide JAPAN」<sup>6)</sup>および「Lonely Planet Japan」<sup>7)</sup>)における各観光地に関する情報の記載の有無と、当該観光地の重伝建(重要伝統的建造物群保存地区)への指定状況、世界遺産への登録状況である。

Michelinについては、観光地に関する記述があれば1点で、★の評価がひとつ増えるごとに1点加算、最高4点とした。Lonely Planetについては、10観光地のうち9観光地が掲載されており、寄与が大きくなりすぎないように、掲載があれば一律の1点とした。重伝建への指定状況および世界遺産への登録状況については、観光地の文化財的価値が観光地の魅力評価に与える影響を除外するべく設定した。文化財的価値に基づく観光地の魅力評価分の減算として、重伝建への指定があれば-1点、世界遺産への登録があれば-2点、双方あれば-3点とした。

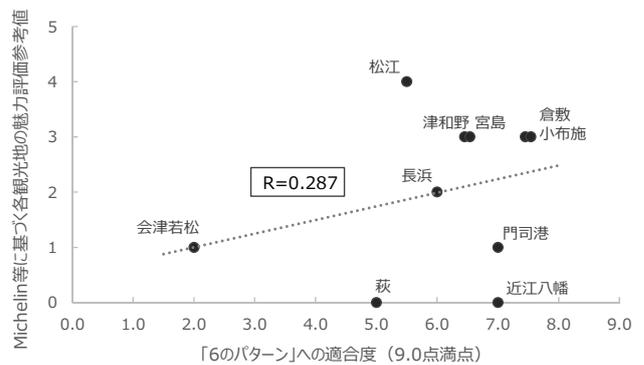


図-2 「6のパターン」への適合度と観光地の魅力に関する試算

これらの算定結果は表-2の右半分に示したところである。この算定結果を観光地の魅力評価と仮定して、先の6のパターンへの適合度(表-3)との関係を散布図に示したのが図-2である。ばらつきが大きく、1観光地の除外で大きく相関係数や回帰直線の傾きが変わる状況ではあるが、一応正の相関、正の傾きという結果となった。

## 5. 観光地評価のケーススタディ

先の観光地の総合的な魅力評価と6のパターンへの適合度との関係(4章)については、ばらつきの大きさや、観光地の魅力評価の代替として用いた指標の不正確さも考慮すると、十分に信頼できるものではない。したがって、これをもって「6のパターン」と観光地の総合的な魅力の関係について確認ができたとは言いがたい。

そこで次に、6のパターンが一般の観光地にも適用可能で、6のパターンへの適合が観光地の魅力向上に寄与するとの仮定のもと、6のパターンと評価基準(表-1)を用いて、観光地評価のケーススタディを実施した。

評価対象としたのは、筆者らの研究拠点にも近く、また本研究で条件とする観光地の規模や独立性にも合致する「小樽」と、「Stroll(ぶらつく、散策する)」という言葉を探してMichelin Green Guideを斜め読みして、結果見つかった「江の島」の2箇所である(他に「谷中(東京都)」があったが、本研究で対象とする観光地の条件に合致しないため割愛した)。

### (1) 観光地評価のケーススタディ：小樽

ここでは、徒歩圏スケールの観光地である「小樽」のうち、「小樽運河エリア」と「堺町通りエリア」に細分して評価を行った(写真-1)。

用いた評価基準は同じく表-1のとおりで、評価結果は表-4である。表-5には、Michelin Green GuideおよびLonely Planetにおける各エリアの記述について抜粋して取りまとめた。

「小樽運河エリア」と「堺町通りエリア」を比較すると、MichelinでもLonely Planetでも「小樽運河エリア」のほうが評価が高いようである。例えばLonely Planetには、小樽運河について、picturesque canal districtとの記述があり、★(Must visit recommendation)およびTop Sitesとしてランクされている一方、堺町通りについては記述がない。

これは表-4に示した、6のパターンへの適合度の評価結果と一致する。6のパターンとの適合について、小樽運河エリアは9.0点満点中8.5点の高得点である一方、堺町通りエリアは2.0点と低い適合度にとどまっている。

(2) 観光地評価のケーススタディ：江の島

Michelin Green Guideにおいて「a tempting place for a stroll」とされ、★は付されていないもののぶらり歩く、のんびりと時間を過ごす場所として評価は高めといえる。

この江の島について「6のパターン」への適合を評価した結果は表-4のとおりで、小樽の小樽運河エリアと同様、総合7.0点と高い適合であった。

なお、Lonely Planetでは、「cliffside restaruants offer sunset views along with local specialties like sazae」との記述があり、風景を楽しめる海岸沿いの飲食店も評価されている。

6. まとめ

今回扱った「観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間のパターンに関する試案(6のパターン)」(図-1)については、筆者らが過去に、温泉街型観光地の事例調査から導き出したもので、「温泉街型の」観光地の魅力評価とパターンへの適合度には正の相関関係があることを以前に確認している<sup>4)</sup>。

本論文は、これらの「6のパターン」の、温泉街型以外の一般の観光地への適用可能性について検証を行うべく、種々の調査・分析を行ったものである。

「6のパターン」と評価基準を用いて、全国でも比較的评价の高い街歩き型の10観光地の調査を行ったところ、ひとつの観光地を除き、いずれの観光地でも6のパターンへの適合度は高い水準にあった(3.章)。次に、過去に温泉街型観光地を対象として行ったのと同様、パターンへの適合と観光地の総合的な魅力評価との相関関係について分析を行ったが(4.章)、採用した観光地の魅力評価指標の適切性の問題もあり、これらの関係について確固たることをいえる結果とはならなかった。一方、6のパターンを用いた観光地評価のケーススタディ(5.章)からは、Michelin Green GuideやLonely Planetにおける観光地の評価と、6のパターンへの適合に一致がみられることが確認できた。

今後「6のパターン」の妥当性をさらに検証するにあ



写真-1 小樽

左上：小樽運河、右上：堺町通り  
 左下：小樽運河の浅草橋(パターン5)  
 右下：堺町通りの歩行環境(パターン6)

表-4 小樽および江の島の「6のパターン」への適合度

	小樽		江の島
	小樽運河	堺町通り	
1. 屋外での時間の過ごし方	○ 運河クルーズ (時刻表・有料)	×	×
2. 観光地のアイデンティティとなる象徴景	◎ 小樽運河(小樽市web 等で採用)	×	○ 青銅の鳥居、参道
3. 豊かな自然と一体化した街並み	◎ 運河水面、臨港線の橋 敷、祝津の山並み	×	◎ 海、岩場、樹林
4. 景観に優れた適度な長さの散策路	◎ 小樽運河	◎ 堺町通り	◎ 参道、遊歩道
5. 散策や滞留の拠点となる広場等	◎ 浅草橋	△ メルヘン広場 (終点・立地に類)	◎ 鳥居前広場
6. 歩行者優先の街路空間	◎ 小樽運河 (歩行者専用)	×	◎ 参道、遊歩道
パターンへの適合点数(最大9.0)	8.5	2.0	7.0

表-5 海外ガイド誌<sup>6)7)</sup>における小樽に関する記述の抜粋

	小樽運河	堺町通り
Michelin Green Guide JAPAN (2015)	walk along the magnificent Otaru Canal, which is always lively, but especially after night fall.	End your tour of Otaru with a visit to the glassblowers' district to the east of Sakaimachi-dori.
Lonely Planet Japan (2015)	nostalgic warehouses and buildings still line the picturesque canal district.  ★(Must-visit recommendation) <b>Otaru Canal</b> Go for a stroll beneath the old Victorian-style gas lamps lining this historic canal and admire the charismatic warehouses ...  Otaru - Top Sights <b>1 Otaru Canal</b>	(言及なし)

たっては、観光地の総合的な魅力評価指標が不可欠であることから、この指標探しに取り組む。観光地の魅力評価にあたっては、研究の趣旨を踏まえると、海外観光客の視点も考える必要があり、したがって海外観光客を対象としたアンケート調査などを実施していく必要があるかもしれない。

また別の方向としては、「6のパターン」が正であることを前提に、各パターンを実現するための屋外公共空間のデザインについて研究、検討を行い、この具体化・詳細化を進める。さらに、これまでと同様の調査手法を通じ、「パターン」の拡充についても検討していく。

#### 参考文献

- 1) 北海道総合開発計画 平成 28 年 3 月, 2016
- 2) 室谷正裕：観光地の魅力度評価 -魅力ある国内観光地の整備に向けて-, 運輸政策研究 Vol.1 No.1, 1998, <http://www.jterc.or.jp/kenkyusyo/product/tpsrbn/no01.html>
- 3) 笠間聡, 松田泰明：温泉街型観光地の屋外公共空間の魅力に関する試行的な調査および分析, 第 53 回 土木計画学研究発表会・春大会, 2016
- 4) 笠間聡, 松田泰明：温泉街型観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間の「パターン」に関する分析, 第 12 回 景観・デザイン研究発表会, 2016
- 5) C・アレグザンダー他著 (平田翰那訳) : パタン・ランゲージ [環境設計の手引] , 鹿島出版会, 1984
- 6) Michelin Apa Publications Ltd : The Green Guide JAPAN, 2015
- 7) Lonely Planet Publications Pty Ltd : Lonely Planet Japan (14th edition), 2015

(2017. 4. 28受付)